

特色ある学校

専門高校における読書活動のメリット

コミュニケーション力を高める読解力と表現力を伸ばすメソッド

奈良県立御所実業高等学校 学校司書 杉江 知子

1. はじめに

本校は、奈良県御所市に位置する、2019年（平成31・令和元年）に創立120周年を迎えた、歴史と伝統のある専門高校である。「ものづくりは人づくり・夢づくり」を学校の基本テーマとし、機械工学科・都市工学科・薬品科学科・電気工学科・環境緑地科の5科を設置し、生徒が専門技術や知識を習得するために体験重視の教育活動を進めている。

ものづくりの現場では、コミュニケーションが欠かせない。そこで、本校の学校図書館では、コミュニケーション力を高めるため、読解力・表現力を伸ばすことを目標とし、様々な体験的な読書活動を行っている。

平成31・令和元年度には「子供の読書活動優秀実践校」として文部科学大臣から表彰され、その活動が評価された。



2. 「読解力」と「表現力」

本校に入学する生徒のうち約半数は「1か月間に1冊も本を読んでいない」という調査結果が出ている。毎年4月に新入生全員を対象とした読書に関するアンケート調査を行っているが、「あなたが雑誌やマンガ以外で読む本は1

か月に何冊程度か」の問いに「0冊」と回答した生徒は、過去5年間の調査では、全体の48%から55%に及ぶ。「文字を読むのが面倒」と言っている生徒もいる。

だが、生徒が全く何も読んでいないというわけではない。生徒を取り巻く環境において、読む機会は多々ある。わからないことがあればスマホで検索する。今日では日常的に行われる方法である。検索窓にキーワードを入力し、検索を実行すると、画面には大量の文字情報が現れる。コミュニケーションツールとしてのチャット・メール・SNSのダイレクトメッセージも文字情報であり、「読む」機会はむしろ増えているように思われる。そこから正しい情報を入手するには、正確に言葉を読み取り、理解する「読解力」が不可欠である。

ものづくりはひとりではできない。つくる人、つかう人、環境を整える人、専門家等、様々な人が関わっている。事故なく、よりよいものをつくる現場には、コミュニケーションが欠かせない。そこには、知識・技術を共有し、相手の言葉を理解するだけでなく、自分の意図を言葉にする「表現力」が必要である。

また、生徒の直近の将来には、就職や進学といった進路の問題がある。求人票、募集要項等の書類から情報を正確に得て行動し、試験問題を正確に把握して解答しなければならない。だが、「正確に読み取る」ことが苦手な生徒も、

履歴書・小論文の作成や面接において自分の考えを言葉にし、自己を表現することに慣れていない生徒もいる。

そこで、本校の読書イベントでは、「読む」というインプットの作業だけでなく、「読んでどう感じ、どう考えたか」を言葉にして「書く」というアウトプットの作業も同時に行っている。

そして、読書イベントだけでなく、蔵書構成や図書室のあり方についても、専門高校として学校の実情に即したのものとしている。

次章からは、本校の取組として主なものを具体的に紹介する。

3. 読書イベントについて

使用するテキスト等は、司書教諭や学校司書、その他の教職員が協力して作成している。

① 青空文庫を利用した読書会

青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) とはインターネット上にある電子図書館のひとつである。著作権が消滅、もしくは著者が許諾した作品が無料で公開されている。

参加生徒はコンピュータ室で作品を読み、その感想を付箋に書き、前にあるホワイトボードに貼って掲示する。ホワイトボードには図1のようにキーワードを記した。

人前で意見を言うことが苦手な生徒にも、その機会を保障するため「付箋に書く」という方法を取った。自分の周りにいる人と感想を語り合うだけではなく、掲示されている感想文を見ることで、新たな感想を思いつく生徒もいた。

また、コンピュータ室での実施後、図書室に掲示した際にも、追加で付箋を貼る生徒がいた。

ここでは例として、宮沢賢治の『よだかの星』を取り上げた。貼り付けられた付箋には『よ

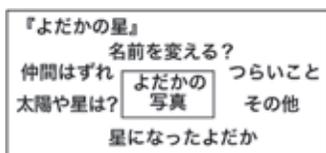


図1 付箋を貼る場所(例)

だかの星』は人間でも同じことが言えるのかも
しれない」「どんな世界にも格差社会はあると思
った」「自分も努力してがんばっていきたい」な
どの感想があった。

② 古典落語に親しむ

古典落語を読み、その演目をDVDで鑑賞した
後、ワークシートに「ドラマ化するなら配役を
どうするか」を理由とともに書き込むイベン
トを実施した。このイベントは図書館や読書に
なじみのない生徒に学校図書館の利用を促し、
読書習慣のある生徒の読書の幅を広げた。

実施時の注意点として、人物については、生
徒がよく知っているタレント等とし、具体的な
特定の人物(生徒や教職員)を指名しないよう
に条件を付けた。

作品は『時そば』と『反対陣』を取り上げた。
キャスティングに挙げた理由として「セリフを
おもしろおかしく言えそうだから」「ちょっと抜
けているところを表現するのが上手そうだと
思ったから」等があった。

③ 朝から読書

1年間で4回、朝の一斉読書を実施した。読
むテキストは全校生徒に配布した。生徒が5分
間で読める量を目安とし、A5判4ページ(A4
用紙二つ折り)のリーフレットを作成した。4
回実施していく中で、段階的に読む量を増やし、
題材も異なるジャンルを用意した。それに伴い、
テキストの内容に応じた問題を設定した。ここ
では主に、反響が多かった第1回と第2回につ
いて詳しく紹介する。

・第1回 ツッコミ読み

『懐中時計』 夢野久作

読むテキストの量…A5判 1ページ

1回目は昭和初期に活躍した夢野久作の短編
を取り上げた。ツッコミ読みとは、「テキスト
を読んで、気になった箇所に傍線を引き、読ん
で思ったことや感じたことを行間や余白にどん
どん自由に書き込んでいく」という読書法であ

り、漫才の「ツッコミを入れる」ように意見を書くため、本校ではこれを「ツッコミ読み」と呼んでいる。



実施時の様子

図2 テキスト表

生徒ひとりひとりが思い思いに書いた感想には「トイ・ストーリーみたいだった」「作者は『ドグラ・マグラ』で有名な人」「人は裏表があってはいけないと思った」等があった。

(参考)『名作をいじる：「らくがき式」で読む最初の1ページ』阿部公彦著 立東舎

◦第2回 ミニレビューを書いてみよう

『現代語訳徒然草 うまくなる人(第150段)』(岩波現代文庫) 嵐山光三郎著 岩波書店
読むテキストの量…A5判 1ページ半

年度内に実施した中で、最も生徒や教職員に好評だった。この回では、インターネット上で行われているミニレビュー(ブックレビュー)を書いてみることで、読後感想をメモする方法を学ぶことをねらいとした。生徒は、読んでから、エッセイが面白かったかどうかを星の数で評価し(最高5つ)、テキストの気に入った文に傍線を引き、その文がどうして気に入ったのか、理由も併せて書き込んだ。

留学生も参加し、英語版のテキストも用意した。生徒たちにとっては、現代にも通じる日本の精神文化を学ぶ機会にもなった。

生徒から出た意見として「ためになる言葉を探すのでおもしろかった」、「いいことばかりが書かれていておもしろかった」等があった。

この回の実施前と実施後のそれぞれ1週間の貸出冊数を比べると、約3.3倍増加した。

◦第3回 作品の冒頭を読んで続きを考える

『世界の中心で、愛をさけぶ』冒頭 片山恭一著 小学館

読むテキストの量…A5判 3ページ

この回では、小説の冒頭を読んで、その続きや結末を考えることで想像力を働かせ、自分の考えを述べることを課題とした。

英語版のテキストは、近隣の図書館になかったため、アメリカの電子図書館、Open Library (<https://openlibrary.org/>) の貸出サービスを利用して準備した。

続きを考えることで、小説の本当の結末はどうなるのか興味を持った生徒もいた。

◦第4回 自由感想

『賢者の贈り物』(5分後に意外な結末5) O・ヘンリー原作 桃戸晴翻案 学研プラス
読むテキストの量…A5判 4ページ

年度最後の課題は、まとめとして「自分が感じたことや思ったことを、自由に書き込みながら読んでみる」こととした。

「朝から読書」の取組の全体の効果として、図書館の利用度を測る指標の一つ、貸出冊数が、実施する前の年度と比べて約24%増加した。

4. 蔵書と図書館利用説明について

本校では、専門高校として、5つの学科に対応した専門性の高い本をはじめ、資格取得や就職に関する本を収集している。また、図書室だけでなく、各科にも配置しており、それらは貸出などの利用も含め、各科が管理している。

専門書等の選書は、専門科教職員、司書教諭、学校司書が、生徒にとって「わかりやすい本」を念頭に、連携して行っている。専門書にはじめて触れる機会にふさわしい本、さらに知識や技術を身につける本、資格取得・就職・進学に関する参考書や問題集等、キャリア教育に必要な本を積極的に収集、探しやすいように一部を別置き、提供している。生徒は図書室に来れば、教職員が推薦する参考書や問題集の実物を見て

使うことができ、生徒の「どう勉強したらいいかわからない」という悩みを解消し、資格取得や就職試験合格の一助となっている。

図書館の使い方については、毎年4月に新入生対象のオリエンテーションを行い、学校司書がクラス単位で1時限を用いて説明している。

学校図書館だけでなく、公共図書館や大学図書館も利用しやすくなるよう、本の置き場所を示す請求記号やレファレンスサービスの理解のため、体験型学習やクイズを導入している。

① 図書館探索ゲーム

日本十進分類法の理解を主題とした、請求記号を暗号に見立て、蔵書の中から1冊を探し当てるゲームである。

日本十進分類法は、日本の図書館で広く使われているため、仕組みを理解すると、本の置き場所がわかり、探しやすいという利点がある。

ゴールでは蔵書の一節を読むため、なじみのない分野の本にも触れることができ、読書の視野を広げることに繋がった。

② レファレンス体験クイズ

調べ物の過程をクイズ形式で擬似体験することで、インターネットでは検索できない項目の調査方法を紹介した。生徒は、インターネットと図書館、それぞれの調査方法の利点を理解し、レファレンスサービスを活用するようになった。

本は、あれば目に触れる機会となる。専門分野や社会への道標となる本をこれからも収集し、蔵書を充実させたい。

5. 交流・学習の場としての図書室

5つの学科に分かれている本校では、他学科と交流する機会や場所は限られている。だが、図書室に来れば、他学科や他学年と交流することもできる。

図書館・図書室は特に用事がなくても居られる場所である。本を読み、学習するといった使い方の他に、ひとりで考えごとをして過ごしたり、図書室に置いてあるパソコンで作業したり、

雑誌や話題のマンガで息抜きをしたり、生徒はそれぞれ自由に過ごしている。ここ5年平均で、1日に図書室を利用する人数は25～30人ぐらいである。

図書室を利用する生徒の中には、時折マナー違反をする生徒もいる。一方で、専門科の課題・実習のレポートや、就職・進学のための履歴書・願書などの書類、面接で話す内容のメモを作成したり、図書室の本で資格を得るための勉強をしたりしている生徒もいる。

図書室の大きなテーブルを囲んで、同じ学科、同じクラスの生徒が相談し合い、学習していると、その姿は自然と、他学科、他学年の生徒の目に入る。後輩が勉強でつまずいていて「あ、それやった。難しかった。」と先輩が声をかけたり、教員が生徒に勉強を教えたりしている場面もよく目にする。先輩の姿は1年生や2年生の1年先2年先の未来であり、同学年や後輩のがんばりも刺激になる。それもまたコミュニケーションであり、自然と生徒のマナー違反も減っているようだ。

6. 読書活動のメリット

「本を読んで、一体何の役に立つのか」は、よく見聞きするフレーズである。本を読むことで知識や技術を身につけるという直接的なメリットもあるが、本や図書室を、生徒のコミュニケーション力を高めるツールとして活用することもまた、大きなメリットである。

これからも、生徒の、よりよいものづくりや社会を生き抜く力を養成する一助として、活動を行っていきたい。

